

校長歴二年近くでの感想

(数学教育の会2010冬の集会)

久留米大学**附設**中学校・高等学校

吉川 敦

(平成22年1月・於御茶ノ水女子大学)

0. はじめに

わたくしは、一昨年4月に現職に就き、半年近くを経たところで、感想を「数学教育の会」2008年夏の会で述べた。

報告は、飯高茂教授のサイト中の「数学教育の会」2008年夏
<http://www-cc.gakushuin.ac.jp/~851051/maed/09yoshikawa.pdf>
が該当する(Google で「吉川敦」を検索すると、トップにこのファイルが出る)。

また、わたくしのHP

<http://www7b.biglobe.ne.jp/~yoshikawa/page3.html>
からたどれるような ppt ファイルが貼ってある(飯高教授のサイトのものの誤字は訂正してある)。

1. 前回の概要

前回報告は、標題にもかかわらず、校長業の話ではない。

眼目は、日本の学校年度を現行の4月から翌年3月までとする、国の会計年度と揃える方式を、早急に、会計年度とずらし、7月または8月からの一年間とすべきだという主張を行なった。

この場合、授業週は34週は確保することを前提にして、

二学期制ならば 授業開始 8月第三週(盆明け)

授業終了 5月第三週

三学期制ならば 授業開始 9月第一週

授業終了 5月第四週

としたらどうかというのである。

一応の得失は前回述べた(前記ファイル参照).

基本的には, 長期の(夏季)休暇を学年の切れ目にするものであり, さらに, 北半球諸国の学年制度と整合させることである.

入試の方式から, 校外活動のあり方までに広く影響が及ぶであろうとは指摘した. また, 後述のように国際交流も深まるであろう.

以上のような提起はしたものの, 具体的な行動をとったわけではなく, また, 関連する意見を集めているわけでもない. しばらく, 繰り返すしかないと考えてはいる.

2. 今回の話の予定

相変わらず、現勤務校のこと以外を主に話すわけではあるが……:

2. 1. 前回の話の補遺

2. 2. 私立「進学校」の役割は何なのか.

2. 3. 「校長」の役目とは？

2. 4. 日本の少年少女に発信すべきメッセージとは？

2. 1. 前回の話の補遺

もともと今回「敢えて」話してみようと思ったのは、現在の勤務校と中華人民共和国上海中学との来年度の交流事業に関する連絡メールの内容について担当の教員から受けた相談に触発されたからである。

7月中旬に、上海万博のサテライト行事として、第三回青少年科学技術博覧会というのが開催されるから、応募しないか、というお誘いのメールが届いた。実は、これは、上海中学との交流事業とは直接関係はしていないことが、確認の結果、判明したが、日本の中等教育、特に、後期中等教育のあり方について考えさせる点があった。

参考：<http://www.siyst.org.cn/siystsite/english/home.jsp>

わたくしが、どこに問題があると考えたのかは後述する。

もう1件は、最近、上海中学から来たメールが、交流時期の改定を提案して来たことである。この件は、学年制と直結しているので、これから説明しよう。

順序として、**勤務先校と上海中学との交流事業**について概説する。これは、前々任の校長が始めたもので、なぜ上海中学でなければならぬのかを籠めて、わたくしは趣旨の詳細については依然理解できていないままである。

校内でも議論がないわけではなく、それについても余裕があれば後で触れたいと思う。

恐らく、当初の意図としては、双方の生徒ならびに教員の国際的経験を増進するということであったのだろう。上海中学は規模といい、伝統といい、社会的影響力といい、さらに、国際性といい、勤務先校とは比較にならない名門校である。上海在住の外国人子弟のための国際学級を備え、かつ、多数の外国人教員が居る。中国共産党とも直結しており、そのような学校と交流があるということは、それだけで自慢すべきことと考える人がいても不思議ではないかもしれない。

交流の実態は、次の通りである：

該当学年は高一，先方も相当と理解している。
訪問団は生徒10数人（希望）＋教員4名の相互交流である。
先方からの来訪団もほぼ同数。双方の構成は相似としている。
交流に参加するのは、双方、現地陣も併せて、50名余りになる。

交流時期は、こちらが夏季休暇に入った最初の週、つまり、**7月の第3週から第4週にかけての時期**である。こちらの寮が空いたことを利用して、交流は双方が寮に宿泊して行なわれている（ただし、女子生徒は近隣のホテルに宿泊している）。言語は英語が原則であるが、系列の大学への中国人留学生の助力も仰いでいる。

交流内容は、いずれの地でも、エクスカージョン、討論、その他交流行事。

最大の問題点は、**交流目的の曖昧さ**である。

「観光旅行」に留まらないよう運営上の工夫はしているが、教育上の観点からは、交流の効果がどの程度残るのか、また、ごく一部しか交流に参加できないということによいのか、そういう疑念は残る。

また、先方からの訪問団は久留米に数日しかおらず、訪日期間の過半は京阪神ないし首都圏で過ごす。ビザ上のメリットは先方にあるだろうが、上海のような大都会から来て、北部九州の自然や中都市をどの程度味わうことができるのか。この辺りは問題である。

わたくしは、**歓送および歓迎の挨拶**で、次のように言うようにしている：

せっかくの機会だから、日本と中国との違いに驚いてください。しかし、違いをそのまま認めてください。違いについての評価や価値判断はしないようにしてください。とにかく観察してください。この経験は、やがて皆さんの成長につれて意味あるものに醸成されていくでしょう。

次スライドに昨夏の歓迎式での挨拶を掲げる：

Good evening, girls and boys, ladies and gentlemen!

Welcome to Kurume, to here Fusetsu High School.

We are very happy to be able to receive you, students from Shanghai High School, again, after a year of interruption (due to the Olympic Torch !?). .

I hope you enjoy this occasion of staying here, though very short. We have prepared quite a lot for you. Unfortunately, some paragraphs in the pamphlet are confusing. You can thus guess the level of machine translation on the web. Well, I am talking about the notes found in the pages explaining the Ito Campus of Kyushu University which you are going to visit tomorrow.

These strange paragraphs will however give a big chance to you and our students , discussing why such queer sequences of words could have been produced..

This kind of misunderstanding might be everywhere, but it just provides you an experience. But please do not try to evaluate anything you will meet from your own idea of values. Just observe them and wonder the diversity of ways you might ever have encountered.

So again I say to you: enjoy your stay.

(2009年7月歓迎の挨拶)

他方、上海の立場で考えると、どうなるか。これはよくわからないのだが、交流時期の7月下旬は夏季休暇に入って、ほぼ一箇月経っており、生徒たちの多くは帰郷している。交流のために、わざわざ戻ってくるか夏休みの予定を変更する必要がある、時期的に中途半端だということがあるようである。交流に参加する教員についても同様の難がある。

これが、上海中学側からの交流時期前倒しの提案の背景にある事情であろう。しかし、こちらは学期中で、正規の授業が行なわれており、したがって、寮は原則として空いているという状態ではない。

ただし、学期中の相互交流型の国際交流というのは検討に値しないわけではない。現実には相当の困難が予想されるが、困難の根源は学年制の差だけではない。近隣校で聞いた話だが、マニラの高校から相互の教室を利用して、2ヶ月程度学年全体を移動させるというのはどうかという提案があったそうである。全寮制の学校なら可能かも知れない。興味深いが一般的ではない。

なお、念のために、語学力自体は基本的な障害になるわけではない。

次に、上海青少年科学技術博覧会が提起していると思われる問題を検討しよう。

7月開催のテーマは、環境・未来・技術革新というテーマで、広く国際的に後期中等教育機関に呼びかけて、参加を求めている。
要求されている条件は、科学クラブや顧問教員の参加では対応できず学校としての開発創造教育が行なわれていることが前提のようである。
これは、現在の日本の後期中等教育での想定の外にあることで、この意味は深刻に捉えるべきだと考えている。

確かに、勤務先校の場合でも、**ブレメンの数学オリンピックの金賞受賞者**が出ており、国内的には、さらに「好成績」を挙げている学校はいくつもある。しかし、それが各各校の教育の質を反映しているとは言えないであろう。たまたま、**素質のある生徒が集まっているかどうかということの結果**だが、それでも、**学校がかれらの素質を磨耗させてはいないということの反映**にはなっているとわたくしは見ている。日本の場合、学校というより**生徒の個人の資質が主に働いての国際的評価**であろうということである。

つまり、上海青少年科学技術博覧会が提起した問題は、**日本の中等教育は目標が矮小化されてしまっており、青少年教育としての初心を失ってしまっているのではないか**ということである。

2. 2. 私立「進学校」の役割は何なのか.

わたくし自身, 私立の「中高一貫校」の出身であるし, それもいわゆる「進学校」に分類されているところである. 現在の勤務校も, 同様に分類される.

私立「進学校」が成り立っている根拠は何か. 建学の精神というものが各校にある. だが, 抽象的な文言であって, どうその肉付けが為されているかが評価されて, 生徒が集まってくるかのどうかは判然とはしない.

ただ, 卒業生の人生で, 建学の精神の文言や校歌の一節が決定的な契機になったという事例報告が数多いことも事実である.

生徒や生徒の父兄の目線で見ると, 目先でもっと評価されているかも知れないものがあるだろうし, 現に, それが無視できないことは当の学校関係者も承知はしている.

つまり, それは卒業生の進学実績であり, 進学先が難関ブランド大学であり, 難関ブランド学部であることが評価されているし, さらに, 塾の戦略によって, このような評価の傾向が増幅されているとも言えるだろう.

ただし、学校、特に、中高一貫校の場合、6年間生徒を預かることになる。進学実績を挙げることに特化したのでは学校教育は成り立たない。

進学実績を挙げることは、ブランド大学入試への対応に関心を集中させることで、ある程度実現できる。極端な場合、ブランド大学の入試科目を重点的に訓練することも一定の効果に繋がるであろう。

職業に直結している難関ブランド学部、例えば、医学部医学科の場合は、堅固な職業観を持って進学を決断している例が多いようであるが、職業選択の幅の広いブランド大学、例えば、東大の場合は、大学合格自体が目的化してしまう傾向は否定できないかも知れない。

しかし、大学合格自体が目的であるかのような教育は、塾の役割である。学校の場合は、生徒の人生の基礎的素養となるものを構築し、大学合格自体は人生実現のための一手段でなければならない。まさに、建学の精神とその実体化こそが重要なのである。

具体的な話になると、ここでは立入りにくい。さりながら、首都圏の進学校と地方の進学校が同一の役回りを担っているとは考えにくい。

ご承知のように、地方の疲弊が語られて久しい。わたくしの観察では、地方の疲弊は四半世紀以上前に遡るもので、基本的な原因は、目先の政治的動機を優先させて産業構造の転換に真剣に取り組まなかったからである。

さらに、バブル期の地方の産業基盤の破壊がこの傾向を加速させ、しかも、首都圏などへの投資がバブル崩壊で企業を弱体化させ、もともとは地方に基盤を持っていた装置産業が壊滅的になった。代替の政策は公共投資であったけれども、ランニングコストの負担に耐えられず、さらに、地方の疲弊を加速化させてきた。

今更、四半世紀前に戻ることはできないが、当時の「失敗」を振り返ることはできる。重要なことは、当時の「成長戦略」を不相当と判断していた人は余りいなかったことである。人口動態の傾向やソヴェート体制の崩壊などすでに予想されていたこともあったけれど、その意味を深刻には捉えてこなかったわけである。一方、この時期は日本人の所得が飛躍的に向上したときでもあった。

以下は本来検証を要する話であるが、まず、そのための方針を掲げる程度のいい加減な物言いであることをご承知いただきたい：

日本の失敗、失われた10年 (**しかし、わたくしの立場からは、失われた四半世紀**)での要所での「歴史のイフ」の分析と検討が要るだろう。

とにかく、起きたことは大都市（主に首都圏）への人口集中と、その加速化である。大都市環境は一時的に悪化した改善のための投資が行なわれ、それがさらに大都市への人口集中を加速化させ、それに反比例するように、地方の人口減少が進行した。従来型の一次産業の衰亡が先行したが、四半世紀前に始まったのは、地方の二次産業の衰退である。

地方の二次産業はどういう意味を持っているか。第一に、持続的な産業であり、かつ、技術革新が常態でもあるので、従事者は教育に関心が深い。さらに、何代にもわたる勤務者がいるように、地方社会の安定性の担保になっている。日本の技能を支えていた職人は、大都会の下町にだけいたわけではなく、全国にいたのであり、その背景には安定した地方社会があったのである。

地方には第三次産業もある。しかし、第一次、第二次産業が安定していればこそその第三次産業である。

地方の私立進学校の生徒の出身階層は、基本的に、第二次産業、第三次産業に、中堅として従事する人たちであり、保護者は子弟に、出身の階層を下回らない地位を期待していると考えられる。特に、最近になっても、この傾向は弱まってはいないのではないか。

かつて地方の二次産業が健全であった頃、そして、子供の数が多かった頃、地方の進学校の卒業生が地元の国立大学よりも東京(の)大学を目指すことには何の矛盾も感じられなかった。また、当時は、東大に限らず、(国公立)大学の卒業生には一応の社会的地位が約束されていたように見えていた。その中でも、種々の点で、東大は別格であり、東大を目指すことにはそれなりの価値が認められていたであろう。

もっとも健全な公立伝統校では、こういう極端な傾向は認められない。後発の地方私立「進学校」なればこそ、公立伝統校との差別化を、例えば、東大進学率や医学部医学科進学率の高さに求めたということもあるだろう。

それは正しかったのだろうか。

地方の疲弊の加速化に力を添えたということはないのだろうか。

解答は不明である。しかし、わたくしはバブル期に東京に本社を持つ大手製造業がこぞって地方工場を閉鎖し、東京周辺に新設の工場を設けようとした、そのメンタリティに対する疑念をいまだに忘れることができない。

当時、わたくしは教室主任として、人事担当者と面接する機会も多かったが、いかがわしさを指摘すると、それは東京の発想ではありませんね、といわれたものである。

これらの企業の中には、バブル崩壊の過程で、投資の失敗による債務過多で倒産消滅したところも多いが、それを見て溜飲を下げたというような気持には到底なれなかった。

実際、後に残ったのは、地方の疲弊と地方都市のシャッター街化であった。

だが、当時の企業を支配していたメンタリティ（「東京の発想」）が、周回遅れの形で、いまだに地方「進学校」を支えているのではないか、という感はある。

それでは、地方「進学校」の役回りは何なのか、と問われると、きちんとした解答は難しい。

地方の疲弊化で、以前より格段に薄くなったかも知れないが、地方の「進学校」を支えているのは、**地方社会の教育熱心な中堅層**である。この層の子弟を公立伝統校と地方進学校が分け合い、特に、**教育に関する自助努力の重要性に理解がある層**が、地方の私立「進学校」を主要な関心の対象に含めてくれていると理解している。

果たして、東京やかつての京都で起きたようなことが、それ以外の地方で生ずるかどうかは不明だが、現政権の(中等)教育政策は、公立校を脆弱化する可能性があると思っており、特に、伝統校の挙止を難しくするのではないかと考えている。そういう意味では、現政権下で、地方「進学校」に機会が(全く)ないわけではないというのが、わたくしの予想である。

他方、先述のように、進学率の高さだけでは魅力ある教育の構築に繋がらない。地方の私立「進学校」の今後は、中高6年一貫教育への特化であり、それによって、入試などでの評価の対象外の部分での教育の充実、つまり、生徒の人間力の強化を図ることであって、**結果としての進学率の高さ**が実現されるのがよいと考えている。

もちろん、日本中がそうなったら、私立進学校の成立基盤を侵してしまうが、そうなったらそれはそれで、よいことではないか。

とは言え、現段階では、生徒が東京大学を志望することには否定的ではない。実際、わたくしは、一部の生徒たちに、

今の東大は首都圏の地方大学に化していると言えなくもない。東大が日本の社会で占めてきた役割を考えればとんでもないことだ。さればこそ、九州の片田舎の出身の諸君の役割は大きい。当然ながら、入学することに価値があるのではなく、入学後が大事だ。種々の面で、大学を仕切ってくれたまえ

と言っている。しかし、特定の大学、例えば、東大、や特定の業種、例えば、医師、に卒業生が集中すると学校としての影響力は落ちてしまう。

地方社会の安定性と成長の増進が地方「進学校」の基盤の強化を招来するのであり、現下の地方の疲弊と東京集中の傾向の中で、私立の地方「進学校」としての均衡ある路線を確立することは非常に難しいが、わたくしたちは、それを諦めるわけには行かないのである。

2. 3. 「校長」の役目とは？

この場には、校長や校長経験者の方が多くいらっしゃるので、ご教示願いたいことだらけである。

しかし、校長が人事権を持っているとか、学校の運営はこうなさいというようなことは、学校に依存することでもあり、必ずしも話題にはできない。

先述の前回記事でも述べたが、校長の「個性」の果たすべき役割は大きい。

実は、その点に、私立校の機会があるのではないかと、とも思っている。他の県の事例は知らないが、福岡県や近隣県の場合、かつては、一校辺りで5年は校長を務めるのが普通であったようであるが、最近では、校長歴自体は長くても、一校辺り2年程度が通例のようで、なかには、ほとんどを1年の在任期間という形で転々とした校長もいる。

この意味で、伝統校といえども、公立校は司令塔が弱体化しており、漂流の可能性もある。さらに、深刻なのは、校長が短期で変わることは、学校独自の中期の計画立案の責任者が曖昧になることである。今後の難しい未来を想像すると、校長在任期間が短いということはよくないであろう。

実は、現勤務先校が大飛躍したのは、昭和40年代の初頭に、県立高校長の5年目の任期の途中で、本校の校長として強く請われて赴任した原巳冬先生以来である。ただし、原先生ほどの人格者であればこそ、校長としての14年間に本校の基礎付けに成功することができたのであるとも考えている。

要するに、校長の在任期間が単に長いだけではいけないのである。校長の役目は何かということ、恐らく、常に、かつ真剣に、自問自答していなければならないだろう。

校長の役目とは？これは設問であって、答えを知っているわけではない。恐らく、空間的にも時間的にも、そして、社会的にも、さらに、言うまでもなく、学校内も学校外も含めて、周辺をよく見回すことが第一歩であろう。もちろん、見るだけではいけない。正しいと思われる方向、望ましいと思われる方向への洞察を欠いてはいけません。この辺は、口先では、日々の研鑽に尽きるとしか言いようのないことではあるが、具体的にはどうするのか？

2. 4. 日本の少年少女に発信すべきメッセージとは？

プログラムを拝見したところ、30分割り当てられていたので、こんな図々しい
標題の節を設けたが、大所高所に立っての意見があるわけではない。

適切なことではないかも知れないが、昨年度の修了式(3月)での式辞を
挙げておく：

<http://www7b.biglobe.ne.jp/~yoshikawa/09-03shuryoshiki.pdf>

要は、基本と応用を述べたものであるが、何が基本かを洞察した上で、応用、
すなわち、基本に肉付けをせよというようなことを、生意気にも述べたもの
である。

言うまでもないことですが、今後ともご指導ご鞭撻のほど、宜しくお願い申し上げます。

ご清聴ありがとうございました。

(完)